

東帝文ニュース

EAST TIMOR NEWS No.10 (最終号)

2002年5月21日

橋が落ちました。雨季が終ろうとしている4月に、エルメラ郡の山間部で大雨が降りました。たまたま、グレノからエルメラに向かう途中の鉄製の橋を渡ると、川の水が何時に無く氾濫し、岩を砕き、河岸を削っていました。後で聞けば何十年振りかの増水との事。思わずカメラを取り出して撮影。後ろから別の車が来ましたので、仕方なく発進し、更に1km位走ると、今度は、道路が幅5m、長さ5m、深さ3m位陥没していました。これじゃしょうがねと、今来た道に戻る。と、先程の橋が既に落下していました。この間5分から10分。後ろの車が来ずに撮影を続けていたら、橋と一緒に運命を共にしていたかもしれません。というのは、橋の上で撮影していたからです。喰わばら、喰わばら。この後、車を放ってエルメラまで雨の中を歩きました。約1時間の距離の間には、流出した土砂が到るところ道路を覆っていたり、削っていたり、こりゃ修復は大難題。



↑土砂流に流される橋

閉じ込められた車を毎日点検に行く事とした2日目、矢張車を閉じ込められた地元の人が、道路の陥没部分を早くも何人かで修理を始めていました。たちまちの生活に困ってしまうのです。私達も同じ立場、即協力を申し出ました。とは言っても日当や資材費という資金協力しか出来ません。それが有り難いと、早速人出を集め1日半で先の陥没部分に、2トントラックが通過できるような仮設の橋を架けてしまいました。やる時は、やるんだ。と言う感じ、吃驚やら、感激やら。とは言え、車がエルメラに帰れるだけで、グレノには行けません。ああ、これで仕事をせずに、暫くは酒びたり。極楽、極楽。

てな事は、許される訳も無い。翌日には、タリモロ村をとおる迂回路がある事が判明。がっくり。極楽にはまだ行けない。併しこの道がまた、風光明媚な難路、高度差600mを9km程で上下する。一日二回往復すると、肩と背中が、筋肉痛。タリモロ経由の道は、土の粒子が非常に細かく一雨来れば、つるつる。氷結より滑る。道は氷ることはなくても、肩が、こ〜りこり。

庶民の楽しみにと、シャナナ氏が大統領に当選したら、どの国の元首格の人が最初に駆けつけるかの賭けを申し出たが、不成立。小生自身は、オーストラリア首相と考えていた。ところがどっこい、4月29日に小泉首相が訪れた。たまたまこの日、SHAREの活動見学に来ていた女医さんをコモロ空港に送って行く事になっていた。空港取付道路に入ると、何と「日の丸」の旗を手に手に、高校生くらいの学生が500人程いたのだろうか。野次馬には、この手の遭遇が結構あるもんだと、関心しつつ学生の列に潜り込む。在留邦人の姿は、数名程度。学生達は、やらせかなどと不謹慎。暫くして、車列が空港から出てきたが、学生達には、どれが小泉総理の姿やら判別できない、国連の車や、同伴者、プレス車と手当たり次第に旗を振る。総理の車は、最後部に近かった。車には、特徴がないし、窓は締め切って手を振っている。その頃学生は、総理は既に走り去ったと思っている時、何と宣伝が下手なんだろうと思ってしまう。車列が行き去った道路端には、くしゃくしゃになった日章旗が風に転がる。賭け金を払わずに済んで良かった、なんて事を考えながら、実は、シャナナ氏に会いに来たのではなく、東南アジア、オセアニアの歴訪のついでに、自衛隊に会いたかっただけなんだと、庶民は、穿つ。同日、つまり(多分)同飛行機にて、小銃を肩から下げる自衛官も到着。まさに、「軍兵」派遣です。



↑ コモロ空港にて

5月1日、新メンバーによる初会合。SHAREとしては、新年度からは、ガラリと活動内容が変わります。そこで、新規にも人を雇用しました。今年度からは、特に、東ティモールの人が中心となるように計画しています。何年後かには、現地CBOとして独立し、運営するための位置付けが要となります。

5月3日には、東京本部代表の、本田氏にも来帝していただきました。新メンバーとも、SHAREの目指しているものは何か、について質疑応答し、又カンボジアやタイ等今までの活動についても、スライド等を利用して紹介しながら、親交をも深めました。東ティモールでは、もはや緊急救援状態は脱しているのだから、これからは、彼等自身の速度で、彼等自身の価値観で活動が行われることが当たり前となります。

合同研修会の中で、日本人スタッフがロールプレイを行いました。「オッパイが一番」という演題。エルメラでは、初乳は黄色いので良くないからと、赤子に飲ませない習慣があります。又、他聞に漏れず、粉ミルクを相当薄めて飲まず場合もあります。そこで、なんてった母乳が一番良いんだということを寸劇で表現しました。私が、おかあさん役で赤ちゃんが産まれたばかりの設定。もともと私は、女性性には憧れと親密感とがある者（男性だから当たり前か？）ですから、演ずる本人が大喜び。勿論、第一場の登場から、観劇者抱腹絶倒。本田氏の名指導により大成功。本田氏本人も、酔っ払いで博打好きの亭主役。前代未聞のキャスト。寸劇後の、意見交換も深まり、一方向性でない研修となりました。

本田氏が帰国する前日、産まれたばかりの赤ちゃんの緊急移送が必要となりました。どうも羊水が気管から肺に入ってしまったらしい。既にチアノーゼが出ている。あのタリモロの道を通らなくては、行けない。エルメラ保健所には、酸素もない。悩む暇なく出発。それでもいつもより早くは走ってみたものの、グレノ保健所に到着した時には、既に呼吸は停止していました。医師の死亡宣告。悔しい。遺体を連れ帰り、父親に報告。何も言えない。運転手さんは、イネ科の植物と25セントコインで車をお祓い。その後川原にて、車の四隅に砂をかけ再びお祓い。生命とは、斯くも短くもあり、永くもあり。合掌。

17日、出産に呼ばれました。陣痛が来ているのになかなか生まれないとのこと。21歳のお母さん、初産。本人は、ハヶ月という。助産婦マリアは、お腹の張りもないし、未だその日には無いのではと言うが、本人は、間違いなく産まれる陣痛だという。グレノに移送するかということになり、車を用意しようと外に出る。マリアさんが、呼びに来る。頭が降りて来ているからここで産める。いきむこと30分。その声が聞こえる。こちらも力が入る。思わず一緒に、ハッ、ハッ、ムウー。頭頂部がこの世に触れてからなかなか進まないのだから、止むを得ず少し切開したとの事。「ウギャー」。産まれたては、肌が真っ白。だんだん赤味を帯びてくる。おばあちゃんに抱かれて、回りを見回している。出産後5分程なのに、もう眼を開けている。疲れたあ。まるで、自分が産んだみたい。しあわせ〜っ！15時51分50秒。ジュリアナ・エスポスト母さん、素敵なお母さんの子の母親となる。

この日は、マウベシという所からエルメラに、有名なマリア像が道行してくる日。前前日から、道沿いは、竹とお花と椰子の葉で飾り立てられている。今朝も5時から、最後の仕上げが始まっている。主権回復を記念したこの道行きは、記念日（20日）に合わせて、順次首都ディリに向かう。明日は、エルメラ上げての一大御ミサ。私が、東ティモールのエルメラに来てから、最大の人出でした。

19日午後11時45分、エルメラでも記念式典が始まりました。慣習服に身を固め、カタナ（この通り発音する）を肩に掛けた30人位の一団が、エルメラ文民警察官を国旗掲揚柱まで先導する。警察官三人は、ゆっくりと、これまでの思いを巡らすように、UNTAETの旗を降ろし、国連文民警察官に手渡す。次に、エルメラ郡長が元ファリンテル兵士と共に、東ティモール民主共和国の新国旗を、これまた、ゆっくりと、ゆっくりと掲揚する。国旗が、ポール頂点に達すると明けて20日。400年待った主権回復（独立）。思わず、涙が出て来る。人々は、静寂のうちに直立不動。「ヴィヴァ」「万歳」と叫ぶより、余程深い感慨が、冷気の広場を充満する。数十分程してから、騒めきが漣の様になり起こり出し、広場のあちらこちらで歌ったり、踊ったりしているが、抑制が効いている。このまま、陽が明けるまで喜び合っていた。私も、人々と握手と抱擁をして回った。奇しくも、日本では、19日に私の息子も結婚式を挙げている筈だ。心から、おめでとう御座います。

縷紅荘主人

高塚政生 記